

---

# 鷲デリレレ

来栖雅之

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

鷺デリレレ

### 【Nコード】

N3425K

### 【作者名】

来栖雅之

### 【あらすじ】

デリレレという鷺は幼いのに憂鬱だった。初飛行が出来ないのは同級生たちも一緒なのに、彼は彼自身の虚栄心のせいで初飛行が出来ないことでひどく落ち込んでしまう。そんな彼は枝の先端でいつも地の底を眺めては物憂げ。

(前書き)

ジャンルをどうすればいいのかわからなかったので、『その他』に  
しました。

ある朝飛べない鷺のデリレレは、親鷺に怒られたことと、自らが飛べない事実を突きつけてくる『現実』という名の刃への恐怖とで、涙腺がゆるゆるになつていた。そして、いつも彼が羽を休める大木の、その太い枝の葉隠れで、ついに泣いた。

「嫌だ、嫌だ。わしはこんなわしはいやじゃ」

鷺だから自分のことをわしと言う彼はまだ若い。生まれてから日の浅い彼が羽ばたけないのも、仕方無いことである。だって、飛べないのは彼だけではない。彼の同級生の八割は幼さのせいでいまだ初飛行を達成していないのである。それなのに何ゆえデリレレは彼が彼自身であることを拒むのであろうか。同級の仲間たちと疲れた羽を慰めあえば良いのに。…しかしデリレレは、同級生に慰めを求めない。また彼らを慰めることもしない。大木の葉隠れから一羽、遠くの同級生たちを眺めるばかりである。

デリレレは、『飛べる側の鷺』になりたかつたのである。二割の既に初飛行を終えてしまった、悠悠とすまして見下した眼をする連中の仲間入りをしたかつたのである。デリレレは才能が欲しい。デリレレは優越感に浸りたい。デリレレは勝ち組になりたい。

それなのに、虚栄心の強い彼なのに、どうしようもなく負けたくない彼なのに、彼は、初飛行が出来ない。二割に入れない。八割を見下せない。

「嫌だ、もう嫌だ。わしは死んでやる。こんな錆びてる世の中からはもうおさらばじゃ」

デリレレは枝の先端から地の底を見た。大木の根っこが浮き出ている草地をデリレレは眺め見て、『ここから飛び降りて死ねるのならばわしは負けないで済むのじゃな』と息を呑んで、それから『へへ』と卑屈に嘴を鳴らした。

『ここから落ちて死んでもわしは初飛行も出来ない雑魚と皆に思わ

れているのだから、皆はわしが自殺ではなく事故で死んだと思うじやろう。初飛行できないことに苛立って背伸びしたデリレレが高い所から飛ぼうとして馬鹿をやったと、みんなわしを鼻で小馬鹿にするじやろう。それはくやしいが、それで終わりじゃ。わしが負けたことをみんなはすぐに忘れる。わしが雑魚だということを皆がはつきりわかる前に、わしがわしの手で命を終えさせることも、また一つの勝利の形じゃなからうか』。

デリレレはそう思いながら枝の先端から見える地の底に再び眼をやった。嘴をカツカと鳴らしてみたら、唾液を垂れ流す。そしてデリレレは、耳を澄ます。しかし零れ落ちた唾液がデリレレの視界から消えて数秒だっても、唾液が地の底に落ちる音は、デリレレの耳に聞こえてこなかった。

デリレレはむなしくなった。本当にこの世から消えてやろうと思った。そう思っただけを進めてデリレレが不安を感じていると、枝が折れた。

デリレレの体重の重みに枝が耐えられなくなったのだらう。ポキリと断ってしまった枝が地の底へと引張られる。それに付してデリレレも落下する。デリレレは絶叫しながら自らが本当に死ぬことを知った。その瞬間に、『生きたい』と脳が思った。

落下する。宙を、小さな鷲のデリレレが。

死ぬときを待つ、小さな命が、悲しみを持った目で。

血の底に、真っ赤な花が咲く。

その寸前。

力強い何かかデリレレの両翼を掴んだ。デリレレが戸惑う間もなく、その翼は彼のまだ幼い体を無理やりに引き上げる。

「大丈夫でしょうか？」

それは女でありながら里で最も勇ましいと評判の鷲、ロコであった。ロコは才色兼備だから、ある意味でデリレレが一番会いたくない鷲であったかもしれないが、デリレレはそんなことを思う余裕も無い程に頭が混乱していたので、地の底にゆっくりと着地するまで自分

を助けてくれたのがロコだということにも気がつけなかった。地についてしばらくデリレレは激しく呼吸をするだけで眼も血走っている。そんなデリレレはしばし落ち着いてから、命の恩人のロコを精一杯の嫌悪でにらみつけた。

「危なかったよ、デリレレ。もうすぐで死ぬところだった。何であんなところから飛ぼうとしたの。あなたはまだ初飛行すらも終えていないのに」

ロコの叱責の内容もデリレレの耳には一言も入り込んでこない。『なんでわしをロコが助ける。よりによってロコ。よりによってロコ。よりによってロコ』。混乱が収まらない脳内で発生してくる才能への嫉妬。それが表情に嫌悪となって曲げられて表出している。そんなデリレレの嫌悪に気がついたロコは気分が悪くなったが、同時に何故デリレレが大木から落ちたのかわかったような気がした。ロコは頬をやわらげてから、デリレレに言葉を掛ける。

「あなたがどういう驚なのか、わたしはあんまり知らないわ、デリレレ。だけど、焦っちゃ、だめ。ほら、周りを見て。あなたと同級の人みなだつて、あなたと同じように悩んでいるわ。今度、誰かに相談してみるといいわ。きっと、そうすればデリレレの焦りも収まるわよ」

ロコの言葉を受けたデリレレの表情は和らぐどころかさらに歪んだ。嫌悪が憎悪に変貌してデリレレはぐにやぐにやになっている。

そんな二羽の背後、つまり、見上げる程巨大な大木、で、高音が鳴った。『キユウウンソン』というなんとも可愛らしい音。

飯の支度が終わったことを告げる合図である。

その音が鳴った後、静かになる。二羽の間の静寂、沈黙。気まぐれな数秒。

口を開いたのはデリレレだった。

「飯を食べにいきます。明日もまた飛べるように練習するんです。飯を食べないと元気になりませんものね」

ひんやりとした言葉を放り投げてから立ち上がるデリレレ。よた

つきながら大木に帰ろうとする。そんな彼にロコは一言だけ告げた。  
「あなただって、やれば出来る」  
デリレレは、イラついた。

翌日。

鷲たちが住んでいる大木。その枝の先端で、またもデリレレは地の底を眺めていた。

『この世から消えるとわしはどうなるのじやろうか。天界があるのじやろうか、それとも地獄で閻魔王が待ち受けているのじやろうか。もしかしたら何も無い可能性だってあるが、それは怖いかもしれん。嫌じゃのう、嫌じゃのう、嫌じゃのう。…だが、わしが将来、落ちこぼれた鷲になるのならば。…そう、いっそのこと。今終らせましたほうが、良いのではなからうか?…昨日はロコに邪魔されたが、今日こそは』

デリレレは、自ら地の底に飛び込んだわけでも無いくせに、自分で飛び込んだのだと勘違いしている。それゆえに彼は今日も飛び降りる気満々であった。(昨日落ちたから、今日も落ちれるはずだ)とバカみたいに勘違いしている彼の瞳は地の底をジッと見つめたまま動かない。

『さあ、行くぞ』

意を決して一歩踏み出そうとした瞬間、突然、地面が揺れた。

デリレレは思わず枝にしがみついた。振動でぶらんぶらん揺れる先端に足の爪で、必死にしがみついた。

その振動は長らく続き、デリレレは『落ちる』と心底、自らの死を覚悟して思わず眼をギュッと瞑りました。しかし、彼の足の爪は思ったよりも力強かった。デリレレが『落ちる』と思ってても足の爪が『大丈夫、大丈夫』って感じて枝から剥がれない。それでも『いや、落ちるって』とデリレレが思っても、足の爪は『いっや、まじで平気だから。大丈夫、大丈夫』と強気の姿勢を緩めず、結局、その状態のまま振動は収まった。

デリレレは強気だった足の爪を眺めながら、『わしチキンだ』と自らを卑下した。

「もう、まじで死のう」

虚ろな眼をしながら地の底に体を預けようとしたデリレレ。しかし、今まさに足の爪が枝を蹴ろうとした時、地の底で真っ赤な花が咲いた。

真紅のそれが血液だということを、デリレレの幼い眼でもすぐに理解できた。どうということだと思いを巡らせて浮かんでくる情景は、どのように考えても一つの結論を導き出す。：今まさに自分が死ぬとしたさつき、わしと別の鷲の誰かがくたばった。

「誰が。誰が死んだんじゃ。どうしてじゃ」

彼自身も気がつかぬうちに、デリレレは枝の先端を蹴り飛ばして地の底へと一直線。もの凄い勢いで空中を落下する。デリレレは地の底にぶつからなかった。地の底にぶつかるスレスレで身体をスムーズに降下姿勢に変えて、不器用な羽ばたきながらも、しっかりと足の爪で、地の底に着地した。

着地したデリレレは初飛行に成功した喜びに浸ることもせず、亡骸の下に急いだ。やがて近づいて、恐る恐る亡骸の顔を覗き込んで息を呑んだ。

「きみは……」

その後の言葉は続かなかった。名前を呼ぼうとしたのだけれど、思い出せなかった。亡骸になっていたその鷲はデリレレの知っている鷲ではあつたが、頭が混乱しているせいか、それとも名前を呼び合う程の仲で無かつたせいか。デリレレは喉に食べ物詰まらせたような顔をしながら、亡骸の鷲に対して申し訳ない気持ちでいっぱいになった。おそらく自分が第一発見者なのに、第一発見者のわしは、あなたの名前を思い出すことさえ出来ない。あなたがどんなことで喜ぶのか知らない。どんなことで悲しんだり怒ったり不思議がったりする鷲なのか、わしはまるで知らない。

デリレレは、しばし亡骸を見つめた。その時間は長かった。長い

こと彼は物言わぬ鷺を見つめていた。

『わしがこうなっていたのかもしれぬのか』

ふと、そんなことを思った。何も見ていない亡骸の、鷺。哀れな遺体を見ながら、『わしはこんな姿になるうとしていたのか』と、思わず凄惨さに圧倒されるデリレレ。

キュウウンンン

飯の支度を告げる高音が鳴るが、デリレレは遺体に背を向ける気分にならない。

もはや陽が傾き始めていた。デリレレも遺体も、夕陽の中。

デリレレは夕陽の中に照らされながら、ただひたすらに憂鬱を感じた。

『なぜ、わしが先に死ななかった。こんなのを見せ付けられたら、もうわしは、死ねない』

夕陽を閉じ込めた燈色の眼から、デリレレは大粒の涙を、ぼろぼろと流した。

それから数日後。

デリレレは枝の先端から離れることが出来ない。

毎日ここを訪れては、遺体の凄惨さと自らの憂鬱を思い出す。

デリレレは初飛行を成功させたけれど、あれ以来は一度も飛んでなかった。飛ぶ気持ちにもなれなかった。

ずっと一人でいたい。

枝の先端に来ては毎日、毎日。デリレレはひたすらに孤独を味わっては、しかし心を穏やかにさせていた。それは現実から逃れることへの快感に他ならなかった。

葉に隠れ、集まっている同級生たちを眺めては現実を思い出す。このままではいけないなど、時たま、彼らと打ち解けてみようと思いを踏み出す。真紅の花の光景を思い出せば、なぜだか、足が止まってしまう。…身体ごと硬直させてから、デリレレは思う。

『わしはもう、このままでもいいや』

そんなことを思う彼の下に現れた彼女は、ひどく不満な顔つきだった。

「あなた、デリレレっていう名前だったのね」

枝の根元から響いてきた声に振り返ってデリレレは嫌な気持ちになる。デリレレは、誰にも会いたくなかった。

「わしはあなたがロコだって知っていました。どうせならわしの名前、覚えておいて欲しかったんですけれど」

仕方無く発せられたデリレレの声はひどく嫌味っただらしい。

ロコは気にも止めないのか、先端にどんどん歩を進める。デリレレは落ちやしないかとびくびくしながら数歩下がって、ロコから逃げる。

「あなたは」

「はい？」

「彼女の名前を知っていたのかしら」

「え」

「彼女の名前よ」

「誰のことですか？」

「先日なくなった、あの鷲のことよ」

デリレレの胸が途端に締め付けられた。

「ああ、あの鷲ですか」

「あなた、名前を答えられなかったわよね。わたしにジェラーのことを伝えに来たとき」

「ジェラー？」

「あの鷲の名前よ」

デリレレは背筋が凍るのを感じた。ロコがひどくこちらを責めているように感じた。思わずたじろきそうになったが、背後にはもはや足場がなかった。

ロコはゆっくりと一歩一歩デリレレに迫る。目と鼻の先にまでロコがデリレレに近づいた時、彼女は口を開いた。

「あなたはどう思った？」

ロコの意味深な言い方に押され、デリレレは詰まってしまう。

「なんのことですか？」

「彼女の死を見てどう感じたのかって聞いているの」

デリレレは数秒沈黙してから、答える。

「別に、なんとも思いませんでした」

デリレレの発した言葉は弱弱しかった。ロコは少し笑ってから、すぐに真顔に戻った。

「いくじがない」

「は？」

「いくじがないって、言ってるの！」

怒鳴りちらすような声だった。ロコはびびったデリレレが先端から落下しそうになった瞬間に彼の両翼をつまみ上げる。そして、ロコはその状態のまま一気に地の底への落下を始めた。デリレレをつまみあげたまま。

ロコは落下しながらデリレレに最大限の恐怖を体験させる。二回転宙返り、バック三回転宙回り、アクセルフルスロットル、ベラルガナット。熟練の技を惜しみなく発揮しながらの落下。デリレレは恐ろしい程の向かい風に煽られてパニックになったのか、「やめてください、何するんですか！」と繰り返し絶叫するが、ロコはアクセルをフルスロットルにしてその言葉を掻き消す。

地の底に降り立ったとき、既にデリレレの頬は涙でぐにやぐにやになっっていた。地の底に顔を伏せたまま、大声で泣き喚く。

「どんな気分だった？」

平然と聞いてくるロコのことをデリレレは心底憎たらしく思った。

この際、この悲しみの全てをこの女にぶつけてやりたい、そんなことも思った。

「楽しかったでしょ？あなたも大人になればああいうことが出来るようになるわ」

『憎たらしい。憎たらしい。言い方が気に食わない。わしが将来落ちこぼれになることをわかっててロコはこういうことを言ってるの』

じゃ』

「私は特別上手なほうだけど、何も生まれつき凄かったわけじゃないわ。周りよりも努力したのよ。誰よりも努力した自負が私にはあるわ。同級生の名前も忘れちゃうようなデリレレ君の比じゃないくらい私は努力を重ねて今の私になったの」

『なんなんだよお前は。同級生の名前を覚えることが努力と関係あるかつーの。わしはただ、ただ、もういやなんじゃ。生きていけないんじゃない。それなのにお前は何でも出来るからって自慢ばかりしよって。お前にわしの何がわかるんじゃ。わしがお前のことをわからのじゃから、お前がわしのことを理解できるはずがなからう。ジェラーとかいう同級生だってわしの名前なんぞ知らなかったに違いない。お前だってジェラーの何を知っておるんじゃ。せいぜい名前と見た目くらいじゃ。それだつてのに全てを知った風な顔をするお前が気に食わぬ。とことん気に食わぬ』

「言いたいことははっきりと口に出して言ったらどうなの、デリレレ。あなたの顔、ものすごく怖いわ。そんなに睨み付けられたら、みんなだつてあなたには近づきづらいんじゃないかしら。私は、デリレレ。あなたはまず、そういう欠陥を治すべきだと思うわ」

『…欠陥？…欠陥だと…？』

デリレレは『欠陥』という言葉に激しい憎悪を感じた。衰えていた彼のプライドがその言葉を聞いた瞬間、燃え盛る。

「わしは今、怒った」

「はあ？」

ロコが気味悪いモノを見るような表情でデリレレを見つめていたが、デリレレは構わず続ける。

「わしは今までプライドの塊じゃった。プライドの塊がわしで、わしがプライドの塊じゃった。…わしはそんなわしを、ひどく嫌な奴じゃとわかっておった。わかっておったからこそ、さらに嫌な奴になりたかった。どうせ嫌なやつになるのならばとことん嫌な奴になつてやるうと思つておった。だからわしは誰のことだつて見下した

かったし、誰よりも優秀でありたかった」

「あら、だったらあなたは優秀とは言えないわね。何せ、初飛行すらもマトモに出来ないんだもの」

「その通りじゃ。わしはマトモに空も飛べない臆病者じゃ。プライドだけで構成されたただのゴミくずじゃと近頃は諦めておる。才能に憧れておった、全知全能になりたかった、誰よりも徹底しておりたかった。だけれど、そんなことに思いを馳せるのはもう止めることにしたんじゃ。わしは所詮ただの鷲じゃった。ロコみたいな特別でも何でもない、わしはただの平凡な餓鬼でしかなかった」

「そう。大変だったのね。だけど、よかったじゃない。そのことに気がつけて、ね」

「ふん。まったくそう思うよ。わしは、ひどい思い違いをしておった」

「誰だつて自分が特別だと思いたいわ」

「違う」

「あら、さつき自分で」

「違うんじゃよ」

「?...なにが」

「わしは気がついたのでじゃ」

「はつきりいいなさい」

「ならばつきり言つてやる。わしは気がついた！特別であるよりも、平凡な餓鬼であることの方が重要だつていうことにじゃ！おぬしみたいに他の鷲を『欠陥』だと言えるような腐り果てた鷲になるくらいだったら、わしは平凡な鷲であることを望む！何が『私は努力した』、じゃ。わしだつて努力しとるわ。人一倍努力しとるつもりじゃわ。おぬしのような高慢ちきの鷲には、わしは、絶対にならんからなあ！」

怒鳴り声は夕焼けに吸い込まれてやがて消えていく。

傾いている夕陽は、デリレレに、遺体の凄惨さを眺めていた自分自身の姿を思いださせた。ジエラーという一羽の鷲をろくに弔うこと

も出来なかつた自分自身。『わしはやつぱり、どうしようもない驚  
じゃ』と、デリレレはまた憂鬱を感じる。

そんな思いに耽つている彼の耳に、耳障りな大声が入り込んできた。  
それは、ロコの大きな笑い声だった。彼女は先程までとはまるで違  
う、屈託の無い笑顔を作っていた。デリレレは戸惑うしかない。

やがて笑い声が収まりかけた頃、ロコは「ごめん、ごめん」といい  
ながら、笑いすぎで溢れていた涙を翼で拭う。ロコは、訝しげに彼  
女を見つめるデリレレを、先程と正反対の表情で見つめ返す。それ  
は慈愛で満ちていた。

「本当、ごめんね、デリレレ。少し、荒療治すぎたかも」

そうして彼女はまた笑った。デリレレはもはや「はあ？」としか言  
えない。そんな彼を見ながらロコは続ける。

「毎日、毎日、地の底を眺めてるあんたを見て、みんな心配してた  
のよ。ジェニーが死んだこともあつたし、近頃若者の事故死が多発  
していることもあつたしで、みんな、あなたが飛び降りるつもりな  
んじゃないかって。…私は落ちたあなたを受け止めたことがあつた  
から、その話を聞いて心配になつたのよ。あなたは周りに自分のこ  
とを話さない驚のようだから、こうして悪口を言つて怒らせて、あ  
なたの本心を語らせようと思つたの。…でも、あんなに怒らせちゃ  
うとは思わなかつたわ。…少し言い過ぎた。デリレレ、ごめんなさ  
いね」

ロコは真剣な表情で頭を下げた。はめられたことを知つて怒りを感じ  
じたデリレレだったが、こう丁寧に謝られては言葉の返しようも無  
い。絶句したまま一言も発せ無くなった。

そんなデリレレを見かねてか、ロコはとぼとぼと地の底を歩き、  
「こつちに来て」

とデリレレを呼び寄せた。呼び寄せられた場所の地面には、薄伸ば  
しにされている赤色があつた。

「ジェラーの死んだところよ」

ロコはとても悲しそうな表情をしている。デリレレも、あの日のこ

とを思い出さずにはいられない。自然とどこから憤りが溢れて来た。

ロコは続ける。

「私はね。私は、あなたに似ているところがあつたの。…さっき、周りよりも努力したなんて言つたけど、実際、あれは本当のことよ。私は自分のことをいつもそうやって慰めて、周りの鷺たちよりも自分が優れていることを誇つて悦に浸るのよ。そういう風に思う時が一番楽なの。幸せなの。人にね、嘲笑われたくないのよ。周りから認められている確証が無いと生きていけない、貧弱な鷺なのよ。私は、あなたもそういう鷺なんじゃないかと勘繰つてた。小さい頃の自分と雰囲気が似ているような気がしたから」

そこまで言い切つてロコは一息ついた。デリレレは絶句したような、びくびくするような表情をした後、ゆっくりと口を開いた。

「それで怒らせて見たら、見事勘が的中したつていう訳ですか」  
すでに涙声のデリレレ。

「ごめんなさいね。ごめんなさい」

デリレレは既に眼を真っ赤にして泣いていた。夕陽を見ながら、薄く伸びている血の跡を眺めながら、デリレレは止まらない涙をポロポロ、ポロポロ。それにつられるようにしてロコも、ポロポロと泣き始めてしまった。

夕陽の朱色が、二羽を朱色に変える。

大木も朱色で、血の跡も朱色。

デリレレは知らなかつた。自分を思つてくれる、わかってくれる鷺がいるなんて、心の奥底ではまったく信用していなかつた。理解してくれるという期待すらもしていなかつた。それなのにデリレレは今、涙を止められない。自分のために泣いてくれているロコの涙の一粒一粒を見ては、デリレレは胸が熱くなつて一杯一杯になる。しばらくは二羽の囁り泣きだけが、地の底で鳴り響いた。

キュウウンン

やがて、高音が鳴つた。飯の支度が出来たことを告げる合図。

合図が鳴り終わって、沈黙。二羽は、涙を流しながらやがて、ロコが言う。

「さあ、ご飯を食べに行きましょう。そうすれば、明日、心配してくれた人たちに恩義を返す勇気が湧いてくるから」

デリレレは泣き腫らしながら何度もウンウン頷いた。そしてごしごしと翼で涙を拭う。

前を見て、ゆっくりと歩き始める。死んだジェラーのことを思いながら。生きている同級生たちのことを思いながら。

「わし、ロコのことを信用していいのかまだわからん。わからんけれど、わしは今日生きてる気分になった。ロコのこともと知りたかって思えた。同級生のみんなども話してみたいって気分になれたような気も、する」

とぼとぼ歩く彼の後姿と言葉は、今までよりも力強い。

ロコはそんな後姿に、一言だけ告げる。

「あなただって、やれば出来るわ」

デリレレは、今度は、イラつかなかった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3425k/>

---

鷲デリレレ

2010年10月28日08時19分発行